

会場から出ても、私の脳ミソの中は興奮状態にあった。いつもよりもほんの少し、アスファルトの地面が遠くに見えた。自分の身長が伸びたのかと錯角してしまいそうだ。せっかく北海道から出てきたのに、せっかくの初めての土地なのに、その景色がほとんど目に入っていなかった。

そう、目の前の光景は、ステージ上の光景のリピート再生。空中のモニターに、何度も何度も繰り返されていた。

あの決勝の2人。どちらも、「用意、始め！」の「用意」の「よ」の瞬間くらいで答案用紙を表に返していた。冷静に考えて、これだけでも驚異的なことだ。絶対私にはできない——答案用紙を破いてしまうのではないだろうか。結果として、「始め！」と言う頃には既に数文字の数字を書いているような感じだったような気がする。

そもそも「用意、始め！」を言うスピードも、私が参加し続けている地元の大会のそれとはまったく異なった。言うスピードそのものが早すぎる。1秒も掛かっているだろうか？ もしかすると私だったら、「始め！」と言い終わっても答案を表に返せていないかも、とすら思えた。

第一、表に返したと同時に数字を書き始めるのは、もはや当たり前前の光景だった。通常ならそろばんを使う種目であるかけ算やわり算ですら、だ。もちろん、そろばんなど使うことはない。ぜんぶ暗算。問題は確か、11桁だったっけ……

$$123,456 \times 98,765$$

とか、

$$12,345,678,901 \div 987,654$$

とか、そんな感じだったはずだ。こんな問題で、紙を表に返した瞬間から数字を書き始めるなんて、とても「計算している」とは思えず、「答えを知っている」としか思えなかった。

でも、あの2人が「答えを知っている」なんていう可能性がゼロであることはわかっていた。つまり、間違いなく「計算している」……

では、何故.....

まったく、想像すらできない。

「先生？」

「何だ？ 寝てたんじゃなかったのか？」

「寝てないよ」

私が余りに喋っていなかったからだろう、先生からはいつものように「軽い」返答が返ってきた。

「答案を表に返した瞬間に数字を書き始めるって、いつ計算したらそんなことできるんですかね？」

究極の疑問はこの部分だった。そして、この問いに対して、先生からは思わぬ「解答」が返ってきた。

「いつ、って。もちろん、表に返した瞬間だろうが」

「いや、2問目とかなら、1問目の答えを書いている間に計算しているとか考えられますけど、いやそれでも十分『速い』ですけど、1問目ですよ。表に返した瞬間に計算が終わるとは思えないんですよ」

「ああ、なるほど。『計算が終わってから』答えを書き始めていると思っているのか」

「ん？」.....と、声にならない反応をしてしまった。またもや頭の中がパニックだ。

「こ.....え？ こたえ.....計算が終わらないと答えを書けるわけじゃないじゃないですか」

「いや、あのレベルになると、計算が終わってから答えを書いているようでは勝負にならない」

「いや、だから、計算が終わっていないのにどうして答えを書けるのか、と.....」

「その説明は長くなりすぎる。こんな歩きながらできっこないだろうが」

「.....」

おっと！ 前方を歩いていた見知らぬ女性にぶつかるところだっ — 女性が突然立ち止まったのだ。もう少し頭を上げると、歩行者用信号機が赤になっていた。それを確認するや否や、意識もせず、答案を表に返してから数字を書き始めるまでの「あの瞬間」を再度空中でリピート再生させている自分がいた。

もはや、さらに続けて聞く問いが思い当たらなかった。つまり、計算が終了していなくても、計算の途中でも、答えを書き始めることが可能だというのが！？ いや、そうとしか解釈できない「解答」だ。しかも、この空中に浮かぶ映像を見ている限り、確かに「計算が終了してから」数字を書き始めているようには見えなかったので、ある意味納得のいく「解答」でもあった。しかし、その「からくり」など私にはまったく想像できなかった。

「先生？」

「ん？」

「先生は、計算が終わる前に答えを書き始めるなんてこと、できるんですか？」

「うーん、かけ算はその域には達していないが、わり算なら可能かな」

「えー！？ 先生ってそんなことできるんですか？」

「まあ、ある程度はできる、かな？」

「じゃあ、やっぱりどうしてそんなことできるか知りたいです！」

「まあお前ならそう言うと思ってたよ。だからこうして大会にも連れてきたんだしな」

そうだ、先生は私のそろばんに対する「興味」を理解してくれているんだ。そういや全道大会にも「引率」してくれたことあったっけ。私から「行きたい」と言ったとはいえ。

「それも良いけどお前サ」

今度は先生が、私の思考を妨げるように聞いてきた。

「はい？」

「計算スピードに驚くのも良いが、お前はわり暗算 6 問の答えを渡されたとして、その答えを 4 秒ちょっとで答案用紙に書き写すことはできるか？」

「はい！？」

何を言っているかは理解できた — 計算をしないで答えを写すだけ。計算している人間に負けるはずないじゃない！と思ったが、次の瞬間には、そういえば 1 問 1 秒も掛かっていないんだという事実に思い当たった。

確か、わり暗算の答えは平均して 3 桁だ。つまり、6 問で 18 個程度の数字を書くことになる。1 秒間で 4 文字以上.....このことに気付いた途端、こう答えるしかなかった。

「多分、無理ですね」

あの2人は、何もかもが人間業を超えているとしか思えなかった。